



今月のことば 平成22年(2010)4月 <No.44>

そのままのお救い

今月は、浄土真宗本願寺派のご門主・大谷光真さまの最新の著書からの言葉をご紹介します。ご門主は、親鸞聖人のご子孫・本願寺24代目のご住職にあたられます。(2014年に退任)

私が若い頃、お説教の席などで「そのままのお救い」という言葉をよく聞きました。不思議な理解し難い表現だと感じたことがあります。教義としては、阿弥陀如来の「そのままのお救い」は間違っていないのですが、私が違和感をもったのは、「そのまま」でいいなら自己反省は必要ないのか、という点でした。

大谷光真 著『愚の力』より



宗門のトップが、浄土真宗で必ず説かれる「そのままのお救い」に違和感を持ったとおっしゃることに驚かされます。しかし、ご門主がこうした表現をされたのには、現代日本人の生き方と決して切り離せない理由がありました。それは、あまりにも“人間中心主義”“自己中心主義”に傾いた生き方です。

何もかもを経済で解決しようとした結果、現れたのはリーマンショックに象徴される投機的な経済でした。また医療の発展は、“長く生きる”ことを唯一の価値とし、本当の幸せとは何かを問わないままです。自国さえ良ければ、他国で戦争や虐殺が起こっても無関心。他にも飽食や児童虐待などなど、数えればきりがありません。

宗教が簡単に「そのままがいい」と言ってしまったら、現代社会が抱える、そして私たち自身が抱える問題もすべて、全面的に肯定しているような誤解を招いてしまうと考えられたのです。



阿弥陀如来が救うといわれるのは、私がこのままではいけないから救ってくださるのです。私の側が「このままでいいのですよ」との姿勢であったならば、救いも何もありません。阿弥陀如来が救わずにいられないのは、今のままのあなたがほうっておけないからです。つまり大変に心配いただいている状態にあるというのが前提です。

救わねばならない私であると気づくということがまずは大切です。その上で、救わずにはおれないと阿弥陀如来に願われていることに気づかされた今を背負って、未来を生き得るということになるのです。

大谷光真 著『愚の力』より

自らの至らなさに気づいたとき、その先には「願われながら生きる」ことへの喜びに満ちた人生が開けていく。生きる喜びが湧いたとき、他者のいのちへの共感が生まれてくる、それが行動となって現れる…。

「そのまま救われる」という他力の教えは、一見、受け身の消極的な表現に聞こえますが、その先には喜びに満ちた、或いは躍動感に溢れた人生の歩み方があるのです。

慧日山 真光寺

